

とやま

日季
につき

つくる、つながる、とやまの暮らし

2018 春

とやま暮らしの話

とやまの呼吸：富山きときと空港

とやまの始点：青柳正規氏×中田英寿氏×石井隆一富山県知事

今日の朝ごはん

おでかけリポート

Toyama Navi

とやまの品：川原製作所の紙

くらしたい国、富山



『とやま暮らしの話』

富山県・南砺市（なんとし）在住

職人たちが生きる、
あたらしい仕組みをつくっていく。

富山県南西部に広がる南砺市。その北部

に位置する井波は、1390年に開かれた瑞泉寺（ずいせんじ）を中心とする一向門徒の寺内町、のちに門前町として栄えたまちだ。江戸時代中期の瑞泉寺の再建にあたり、京都本願寺の彫刻師から地元の大工らが技法を学び、彫刻のまちへと発展。井波彫刻は国の伝統的工芸品となり、いまも多くの職人が住む希有な地域だ。

このまちに2015年から暮らすのは建築家の山川智嗣（ともつぐ）さん、さつきさん夫妻。上海にも拠点を持ち、商業施設や公共施設の設計、企業のブランディングなどに携わってきた。井波では、「職人に弟子入りできる宿」がコンセプトの「BED AND CRAFT」をプロデュース。職人との交流を軸にした企画で、グッドデザイン賞2017の岩佐十良審査員特別賞を受賞。さらに、新たな取り組みも始めたお二人。その歩みや思いを伺った。△

写真左より時計回りに、井波別院瑞泉寺。藤の花の季節にはお茶会も。井波彫刻の作家、田中孝明さんの作品。井波の歴史あるお菓子「糸巻御所落雁」など。



やまかわともつぐ・さつき／富山県出身の山川智嗣さんと、兵庫県出身の山川さつきさん夫妻はともに建築家で1982年生まれ。東京、上海の建築事務所を経て、2011年に上海で独立。2015年に南砺市に拠点を設け、職人体验ができる宿「BED AND CRAFT」をプロデュースし、グッドデザイン賞2017を受賞。東京メトロ銀座線 駅デザインコンペ優秀賞など受賞歴多数。建築の枠を超えた活動で注目を集めます。 <http://corare.net/>

南砺市：富山県の南西部に位置し、人口は約51,800人。田園地帯に民家が点在する「散居村」や、世界文化遺産「五箇山合掌造り集落」など、日本の原風景が残り、自然や歴史・文化が豊かなところ。

- 写真・右：BED AND CRAFT TATEGU-YA前の山川さん夫妻。
 - 左：建具屋時代の道具が床の間に飾られ、かつての記憶をとどめる。
- <https://www.bedandcraft.com/tategu-ya/>



↙智嗣さんは富山市生まれ。明治大学理工学部建築学科に在学中、半年間休学して、大学の先生の上海事務所の立ち上げにインターンとして勤務した。このときの躍動感に満ちた体験が現在につながっているという。大学の卒業設計では最優秀賞の堀口賞を受賞し、その後、東京の設計事務所に就職。同期入社の一人が、さつきさんだつた。

さつきさんは兵庫県尼崎市出身。学生の頃から建築家の伊東豊雄氏のコンペなど、多くのコンペで受賞していたが、皆と同じように、東京でインターンをしても面白くないと自ら探し出して、建築家の迫慶一郎氏の北京事務所でインターングとして勤めた。それは、智嗣さんの上海滞在と同時期だった。二人は帰国後、就職先の東京の事務所で出逢い、中国での共通体験から、すぐに意気投合し、惹かれ合つた。

当時の東京での暮らしは、満員電車で出勤し、休日もなく朝方までCG制作する日々。「それがあたり前だと思つていた」と話す一人。しかし、若くして体を壊す先輩がいたことや、海外で仮想現実でいた智嗣さんは仕事を辞め、カナダの語学学校に1年間留学した。

●写真・右：BED AND CRAFT TATEGU-YAのロビースペース。梁や窓辺に田中孝明さんの彫刻作品が飾られている。 ●左：自宅部分は、昔の建物の気に入つた部分を残し、暮らしやすくリフォーム。既存の建材を使わず、ほぼ職人の手づくりだ。「面倒なところが、素敵に感じるもの」とさつきさん。キッチンには美しい色彩のタイルを。ランプシェードは籠にペイントしたもの。上海、デンマーク、日本の家具などが調和する。杉板の天井は、もとのまま。上海生まれの猫のちよんまげとも、ゆったりくつろげる心地よさ。



現在は南砺と上海に拠点を持ち、東京、大阪など各地のプロジェクトにも携わる二人。ではなぜ、南砺なのだろう。

「これから2拠点、3拠点居住は一般的になるはずで、僕らも移住したつもりはありません。将来、ニューヨークやパリ、東京にも拠点を持つたらいいですね。一方で、故郷の富山では空き家や人口減少などの問題があり、これまで培った建築やブランディングのスキルが活かせたらとも考えていました。そんなとき、知り合いがいままの井波の物件を紹介してくれて。上海生まれの猫のちよんまげと暮らすことも、決め手の一つでした(笑)」。

卒業後、智嗣さんはニューヨークで就職する予定が、リーマンショックで事態は一変。「中国だけは景気が良く、上海の知り合いの建築事務所に連絡を取ると、来ていいよと」。親には大反対されたが、ホテルを3日間だけ予約し、東京にいたさつきさんと上海へ。世界中から人材が集まり実力主義の側面がある一方、建築図面よりも現場での会話や手仕事が重要視され、ものづくりの原点としての面白さを感じたという。一人は上海の別々の会社に就職し、翌年には結婚。その後独立し、上海中心部に「トモヤマカワデザイン」を設立するまでになった。

●写真・右：上海のトモヤマカワデザイン。歴史的に価値ある洋館をリノベーションしたもの。日本企業の中国進出にあたってのプランディングのほか、大型商業施設など、多彩な事業に携わる。 ●左：trattoria da Takeshiは、宿泊客にも案内するイタリアン。周辺のお店や観光情報は厳選してアプリでも紹介する。地元客のみだった居酒屋に、外国人客が訪れて新たな交流が生まれるなど、地域の人からも好評だ。 trattoria da Takeshi 定休日：水 富山県南砺市井波979-1 TEL.0763-82-0527



山川さん夫妻は、壊される寸前だった築50年の建具屋の建物を購入。土地は借地で経済的にも心の負担が軽く、周辺には井波の風情ある町並みが残り、2階には空きスペースが。そこで、職人体験ができるゲストハウス「BED AND CRAFT」を提案し、地元の住宅メーカーとコラボして実現していく。

「工業化が進む中で、昔ながらの手仕事の技や、家を入れ替える職人を決めていた『お抱え職人』という慣習が失われつつあります。が、井波にはまだ、優れた職人たちが多くいて、それが残っている。そこで、ONEゲストハウス、ONE職人という考え方で職人とコラボし、宿泊客が職人体験することで、手仕事の良さを再発見し、職人との新たな関係性を作つていただと。職人をスターにするような、魅力的で経済的にも持続可能なシステムをつくりたいと考えました」

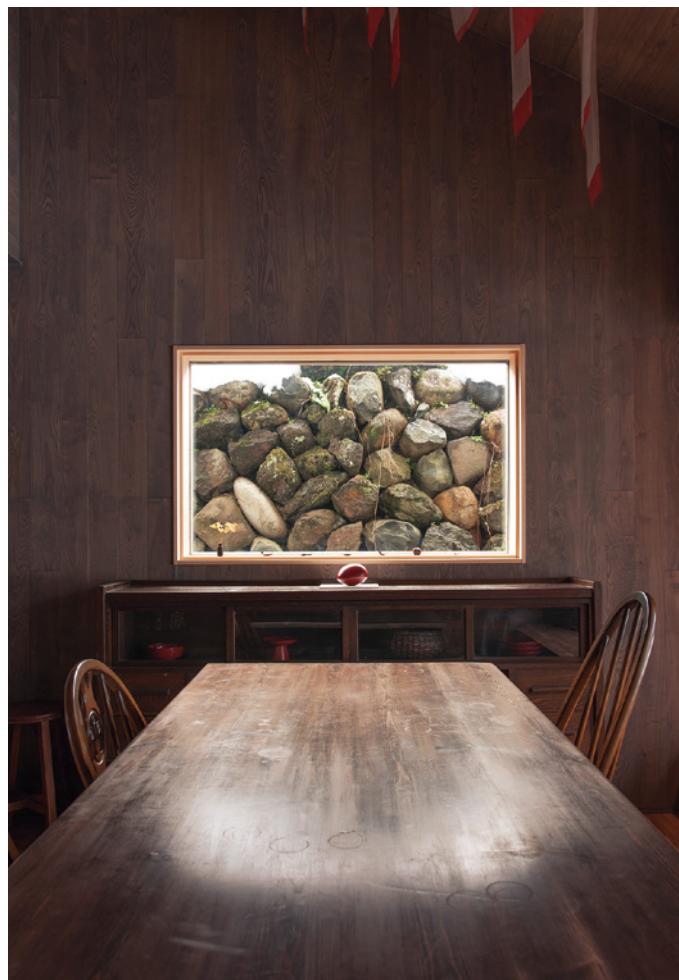
「BED AND CRAFT」は利用者の7割が海外からの旅行者。平均泊数は3泊で、宿泊客と地域の人との交流も生まれている。木彫作家、田中孝明さんに教わる木のスプーンづくりも人気だ。さらに、株式会社コラレアルチザンジャパンを設立し、クラフトを活かした新たな価値づくりの場もスタートした。

●写真・右: 木彫作家の田中孝明さんと(写真右端)。孝明さんと早苗さんはご夫婦で、山川さん夫妻とは気の合う仲間。「ここにいながら世界を見ることができ、毎日が充実している」と孝明さん。山川さん夫妻は「まちづくりではなく、昔ながらの技を伝えるレアな職人と協力して、大勢ではなく、ニッチな人が好きになってくれるような新しい価値とシステムをつくりたい」と語る。 ●左: BED AND CRAFT taëでは、隣接するお寺の石垣の借景も見事。富山では小ぶりな一軒屋だが、やさしい雰囲気の空間に、田中早苗さんの乾漆の作品が映える。作品購入も可能。1日

1組限定で、キッチンもあり、長期滞在にもいい。

<https://www.bedandcraft.com/>

●左上: BED AND CRAFT taë外観。



作品だ。

「彼女の新しい世界観が引き出せた」と話す山川さん。田中さんも「面白い経験ができる、次の作品づくりへの思いに火がついた」と語る。ここではシーズン毎に新作の発表が可能で、宿泊料の一部が作家に支払われる「マイギャラリー制度」という仕組みも画期的。キッチンなどもあり、住むように滞在して、職人と触れ合える魅力的な場だ。職人、編集者、写真家らとコラボし、次々と新しい価値をつくりだす二人に、多くの人が注目している。

*

山川さん夫妻がプロデュースし、2018年1月にオープンしたのは、養蚕業で栄えた豪商の家を改修した小さなゲストハウス「BED AND CRAFT taë」だ。内装には井波在住の漆芸家・田中早苗さんをメインアーティストに迎え、設計段階からコラボ。「taë」は「多重」という意味で、漆、麻布、和紙などを幾重にも重ねてつくる乾漆の工程や、まちの歴史の重なりを感じ取って欲しいという思いがある。天井で揺れるのは土佐和紙に朱漆を塗ったインスタレーション。和室にも大きな乾漆の作品が飾られ、華やかな雰囲気に。「漆のイメージを固いものから、もっと、柔らかなものにしたい」との山川さんの要望を受けて、田中さんが挑んだ

ある。天井で揺れるのは土佐和紙に朱漆を塗ったインスタレーション。和室にも大きな乾漆の作品が飾られ、華やかな雰囲気に。「漆のイメージを固いものから、もっと、柔らかなものにしたい」との山川さんの要望を受けて、田中さんが挑んだ

作品だ。

「彼女の新しい世界観が引き出せた」と話す山川さん。田中さんも「面白い経験ができる、次の作品づくりへの思いに火がついた」と語る。ここではシーズン毎に新作の発表が可能で、宿泊料の一部が作家に支払われる「マイギャラリー制度」という仕組みも画期的。キッチンなどもあり、住むように滞在して、職人と触れ合える魅力的な場だ。職人、編集者、写真家らとコラボし、次々と新しい価値をつくりだす二人に、多くの人が注目している。

とやまの呼吸

朝焼けの立山連峰を背に飛び立つ飛行機。富山きときと空港周辺では、雄大な景色が広がっている。

空港名の「きときと」は、海の幸が新鮮であるとか、人が生き生きしているという意味の富山弁。空港の愛称に全国で初めて方言が採用され、日本で唯一、河川敷に設けられたというユニークな空港だ。現在は東京、札幌との国内線、ソウル、大連、上海、台北との国際線が定期運航中で、国内外の旅行客が行き交う。羽田・

成田からの乗り継ぎで、国内外とのアクセスも抜群だ。

羽田から富山に向かうと、晴れた日には左手直下に富士山が。次に、北岳、八ヶ岳、槍ヶ岳、立山連峰、黒部湖など、南北アルプス周辺の息をのむ絶景が次々と左右に現われ、雲の上に広がる青空に、心がすっと軽くなる。これが羽田・富山便の大きな魅力で、やっぱり、窓側の席を予約したくなる。普段とはひと味違った非日常感に、心躍らせる空の旅だ。



東京(羽田)-富山便は日本有数の絶景路線であり、富山きときと空港は神通川の河川敷に設置された空港。シーズンには周辺で鮎釣りを楽しむ人も多い。富山きときと空港へは、羽田空港からANA便で約1時間。富山ICからは車で約5分、JR富山駅からバスで約20分と、まちなかとのアクセスがいい。無料駐車場も1,515台分完備。ピークシーズンはチャーター便も多数就航。

④富山きときと空港 〒939-8252 富山市秋ヶ島30番地

<http://www.toyama-airport.jp/>



絶景を超える、 空の旅へ。



写真：第2回富山きときと空港フォトコンテスト 優秀賞「飛翔」毛利桂子

石井隆一富山県知事の とやまの始点

ゲスト＝

青柳正規氏 中田英寿氏

東京大学名誉教授

一般財団法人 TAKE ACTION
FOUNDATION 代表理事

国際北陸工芸サミット「U-50国際北陸工芸アワード」選考委員長の青柳正規氏と委員の中田英寿氏、石井隆一富山県知事が、富山の工芸の可能性を拓げ、発信するため大切のことなどを語り合いました。

工芸を取り巻く 世界的な状況と未来像

石井 富山県には、職人や作家の皆さん方が磨き上げ、育んできた工芸の伝統や優れた技があります。生活様式の変化などで、産地全体が苦戦している中、危機感から新たな挑戦をして、成果をあげている作家や職人の方々が出てきました。

今回の国際工芸サミットは、4年前、当時、文化庁長官でおられた青柳先生とのご懇談の際に話題となり、その後もご助言をいただきつつ、文化庁にも働きかけ、構想を具体化してきました。

今回のサミットでは、富山県美術館において「ワールド工芸100選」展や「素材と対話するアートとデザイン」展を開催し、さらに、国宝・瑞龍寺をサブ会場として、「U-50国際北陸工芸アワード」(注)を開催しました。お二人をはじめ、このアワードの選考委員が参加されたシンポジウムでは、日本と世界の工芸に関する有意義でエキサイティングなお話を多く伺いました。まず、工芸を取り巻く世界的な状況や未来像について、青柳先生のお考えをお伺いします。

青柳 古典的な美術では、「創造性」・「主題」・「質」の3つの要素がバランスよく構成されていましたが、ヨーロッパでは、印象派が出てきた頃から「創造性」が重視され、「質」が軽視されるようになっていきます。一方、日本では、「創造性」は小さいけれど、「質」は非常に高いものが維持されました。工芸のような「質」だけが高いものは、ここ20年ほどの間に世界のさまざまなもの

造形表現の中でユニークだと捉えられています。しかし、現代において、生活様式の変化等により縮小してきた日本での工芸の販路を拡大するためには、工芸作家がデザイナーと協力し、「創造性」を大きくする必要があります。また、工芸作家自身が市場をもつと意識する必要もあるのではないかでしょうか。エルメスやグッチのようなブランドディングも一つの方方法でしょう。

富山県には、富山市の岩瀬に、木工や陶芸、ガラスなどの工芸作家たちが集まっているところがあり、通りを歩けばアトリエが見え、作品の購入もできる。これは一種のマーケティングだと思います。この他にも、南部鉄瓶が、工業デザイナーの奥山清行さんと結びついて、ヨーロッパで販売をして新たな市場を開拓したという例もあります。

中田 日本が一番弱い部分は、海外に出ていくことが一番のPRだと思っていました。今回のように日本の国内で国際的なコンペを開くことが、一番のブランディングではないでしょうか。海外に出て日本の方が賞を獲つたとしても、それは個人の賞であり、国の賞ではありません。他方、日本でこのようなコンペを開催すれば、たとえ外国の方が受賞したとしても、このコンペで獲つたことに価値があり、結局はこの国のブランド力が高まります。

日本には、工芸以外でも、様々な分野で非常に高い技術を持つ人が多いので、より多くの国際コンペが国内で行われることが大切です。

石井 工芸の販路拡大のためにも、ご提言のように、「創造性」を大きくすることが重要で、優れたデザイナー



(左から)石井知事、青柳氏、中田氏

の積極的な参加・協力が望まれます。

県では、20年以上前から、総合デザインセンターでデザイコンペを毎年開催し、延べ約7500点に及ぶ

デザイン提案があり、うち50件ほどが商品化されています。また、県内企業が企画または製造した品質・デザイン性に優れた商品を県が選定した「富山プロダクツ」(現在204品目)の年間売上は7年前の約10億円から順次増大し、平成28年度は62億円になりました。長年の努力の積み重ねの成果がようやく出始めています。

さらに、4年前から、新たなチャレンジとして、ニューヨークで2年連続、本県の伝統工芸品の展示会を開催しました。国内だと、来場者の作品に対する評価に、

産地による一種の序列意識があるように感じることがあります。

が向こうのコレクターは、厳しい意見も含めて、作品そのものを見て、評価してくれる。あるコレクターは、ある作品の製作プロセスを詳しく聞き、納得すると、「この作品はなかなか良い。ただし、ニューヨークで売るには値段が安過ぎる。まがいものだと思われるから、売値を2~3倍にしなさい」とまで言つてくれ、その通りにすると翌日サッと売れました。また、別のコレクターは、ある作品を気に入ると、翌日、メトロポリタン美術館の学芸員を連れて来て、「購入して1年ほど経つたら、美術館に寄贈したい」と提案し、学芸員が承諾すると、すぐに商談が成立しました。日米の税制の違いで、美術館への寄贈については寄附金控除などの効果が大きい面もあるのでしょうか。ミラノにも3年前の万博を機に2年連続で伝統工芸品の展示会を開催し、「実用的で美しい。シンプルで洗練されている。

エレガントで繊細、心が和らぐ」などの高い評価をいただけました。

今回の国際北陸工芸サミットの一環としての、50歳以下の工芸人を対象とする「工芸アワード」については、短い公募期間でしたが、予想を超えて、35の国・地域から、403作品の応募があり、各国の選考委員からも、優れた作品が多かつたと伺っています。このアワードを一回りにせず、継続してほしいとのお話をもひただいており、トリエンナーレのような形で3年ごとに開催し、充実を図る方向で検討していきたい。

工芸を好きと思える機会を増やす

中田 私が工芸に携わっているのは、助けなくてはいけないという思いではなく、工芸作家や作品が好きだからです。逆に言えば、工芸を産業として発展させるには、工芸が好きな人を増やすことが大事です。しかし、一般の方が工芸品に触れる機会は、以前に比べ圧倒的に少なくなっています。当然、マーケットはどんどん小さくなる。一般消費者は興味が無いわけじゃなく、本物の良さを知らないのです。すると、機械で大量生産したものも、手作業で作ったものも同じに見えて、値段で判断してしまうことになります。いいものを作ることと、情報発信することでより理解してもらうこと、の両方をやらないと、日本の工芸は伸びません。

青柳 工芸の歴史を考えると、例えば明治時代のパリ万博(1878年など)、ウィーン万博(1873年)では、日本の工芸品は飛ぶように売れました。というのも、

ヨーロッパで産業革命が始まるのは1760年頃。日本が近代化を図るのは明治時代の1868年ですから、日本がちょうど100年遅れています。これほど遅れてしまっているので、日本がイギリスやフランスの真似をした産業革命による製品だけではないということです、富岡製糸場のようなもので近代化を図りながら手工业も残し、その一番の中核が、工芸品を作ることでした。日本の工芸品がヨーロッパやアメリカで大変人気があつたのは、欧米では近代化をどんどん進めたため、いわゆる伝統的な工芸が衰退していったからです。

ところが、それだけ売れるので、日本の工芸作家たちが、欧米の方々が好むであろう意匠を勝手に考えて、好みに迎合していった。そのため、シカゴ万博(1893年)のときには、悪評を買って、売れなくなってしまうのです。

石井 1900年のパリ万博では、高岡市出身の林忠正が日本事務局の事務官長を務め、日本の美術や工芸の魅力発信に大きく貢献し、フランス政府から、レジオン・ドヌール勲章を授与されています。また、求めに応じて「高岡銅工二答フル書」を高岡の銅器職人たちに送り、日本の工芸品の高い技術を認めた上で、外国の形を真似るのではなく、純粹な日本の形を選ぶこと、一方で、伝統にこだわりすぎず、世界に理解される美しさを目指すべきだと説いています。その後、林の助言や取組みが十分な成果につながらなかつたということでしょうか。

青柳 それらを踏まえ、昭和初期に、後に首相になる岸信介が仙台に意匠研究所をつくります。日本の工芸家が、独りよがりの欧米向けの作品をつくるのではなく、研究を土台にして、デザインを加味した工芸にしてい

こうとした。しかし、戦況悪化や昭和恐慌などから、うまくいきませんでした。

富山県には、総合デザインセンターなどがあり、経験の蓄積やきちっとした見通しがあります。そういう強みと、工芸作家たちの連携によって、大きな可能性が開いていくのではないかと思います。

つなぐ人を育てる

中田 日本には、プロデューサーという存在がどんどん少なくなつておらず、そのような、人と人をつなげていく人材を育てていかなければなりません。

昔は、作る人と売る人の分業がはつきりしていました。今は、作つて売る時代です。しかし、全体を見ながら、きちんととしたマーケティングやPRができる人が非常に少ない。ものづくりをしている人たちも、それがあまり得意ではないことが多い。

つながりという観点からいえば、インターネットがあるため、簡単に見えるのですが、逆に、人がつながりにくくなっている部分があるのでないかとも感じます。そういう部分も含めて、オーガナイズすることが必要ではないでしょうか。

このサミットを含め、富山県がやろうとしている意図は、非常に面白いと思います。一方で、形を大事にして、ただやればいいということではなく、現場での人と人のつながりをどうつくるのか、具体的にどこへ向かうのかを明確にする必要があります。生活が多様化するなか、美的感覚も違えば、生活様式も違う。そのなかで、どこ

へ向けた生活を目指すのか、昔ながらの、素材を大事にした心温まるものなのか、それとも、最先端の技術を使つた美なのかななど、いろんな形があり、答えはないのかもしれません。富山県の生活はどういった方向を目指すのかを打ち出していかないと、みんなを悩ませることにもなるのかなとは思いますね。

青柳 今、富山はすごく、元気だと思います。YKKのようなグローバル企業や、南砺市の利賀村で頑張つて世界に演劇を発信している鈴木忠志さんもいらっしゃいますが、工芸で注目すべきは、やはり能作ですね。通常、工芸は、完成された状態で買う人に作品が届きますが、能作の飛躍になつたのは、あの一枚の錫のプレートを自在に曲げることで、果物かごにもちょっとした小物入れにもなるという、最後の形態を決定する部分を買つた人に任せているところだと思います。それによって、工芸の完結した世界ではなく、人間とモノとの関係ができるのですね。グラフィックデザイナーの佐藤卓さんは、「デザインとは間(あいだ)をつなぐことである」とよく言つておられます。これは大変な名言で、モノとモノやモノとコト、コトとコトをつなぐことがデザインなのだとということです。おそらく能作の商品は、一枚の平面から最後の立体化するところを買つた人に委ねることによって、モノと人の間をつないでいる。これが、まさにデザインなのだと思います。

そうしたことは、富山県に、情報集めを得意としていた葉売りの精神性が、まだ残つているということです。それをうまく、総合デザインセンターがつないでいけば、もっといいものができてくるんじゃないかな。

工芸やものづくり技術とデザインとの 交流・融合で新たな飛躍を

石井

富山県には雄大で美しく、かつ厳しさもある自然・風土の中で育まれてきた多彩な人と文化の魅力があります。

大伴家持が立山の神々しさを和歌に詠み、親鸞上人や松尾芭蕉が訪れ、福光に疎開した棟方志功にも影響を与えた。それがアワードで最優秀賞に輝いた川原隆邦さんをはじめ、工芸人の挑戦する姿勢につながっているようにも感じます。また、本県では、次世代に高度な匠の技をつなぎ継承しようと、2年前から後継者の育成とマッチングについて助成することにしています。

次に、デザイナーなどの参加については、今回のアワードで「つながり」のできた国内外の多くの応募者とのネットワークや、長年のデザインコンペを通じての人材育成とマッチングについて助成することにしています。ワードで「つながり」のできる国内外の多くの応募者との拠点が、昨年10月、総合デザインセンターに新設したクリエイティブ・デザイン・ハブです。ここを、国内外の若手のデザイナー等の交流の場として、工芸品のみではなく先端的なものづくりでもコラボし、新商品の開発にも積極的に取り組んでいきたい。ちなみに、一昨年、私が訪台し、台湾のデザインセンターと県総合デザインセンターとが連携協定を結びましたが、早速、台湾のデザインと富山の金属铸造技術のコラボにより海外向けの新商品の開発につながっています。

さらに、中田さんのご指摘のとおり、情報発信により理解者を増やすことが重要です。北前船による交易や売薬で栄えた歴史など、進取の気性に富んだ県民性が

あり、高岡や南砺、岩瀬、立山山麓など県内各地で、意欲的に取り組んでいる若い世代の知恵や感性、エネルギーを活かしていきたい。また、日本橋とやま館での伝統工芸の実演や体験型ワークショップの機会なども、積極的に設けていきたい。

一昨年のG7環境大臣会合、昨年の全国植樹祭、今般の国際北陸工芸サミット等に引き続き、本年は、ねんりんピック、電磁波工学国際会議、国際防災学会、来年は、日台観光サミット、シアター・オリンピックス、「世界でも美しい湾クラブ総会」(内定)の開催など、富山県での国際的、或いは全国的な注目度の高い、コンベンションやイベントの開催が相当に増加しつつあります。こうした機会なども活かし、魅力的なエクスカーションのモル例として、豊かで美しい自然や美味しい食の魅力とあわせて、文化、例えば県総合デザインセンターや能作の新社屋などを中心とした「工芸とデザイン」のゾーンの魅力や「アートとデザインをつなぐ」富山県美術館の取組みなどを国内外に積極的にアピールしてまいりたい。

お二人には、今後とも、ぜひご助言、ご協力をいただきたく存じます。今日はどうもありがとうございました。

(注)U-50国際北陸工芸アワードは2017年に富山県で開催された国際北陸工芸サミットの一環として行われたコンペ。50歳以下の若き「工艺人」を対象に作品を募集し、工芸作品表現・技術のほか、工芸に対する考え方や取組戦略と実践・未来への展望などを総合的に評価し奨励。国際的なネットワークや「コラボレーション」の機会を創出し、工芸の未来ビジョンを描く目的がある。35の国・地域から403点の応募があり、優秀作品は富山県美術館などで展示された。



青柳正規 あおやぎ・まさのり／東京大学名誉教授

博士(文学)。東京大学大学院博士課程修了。前文化庁長官、東京大学名誉教授、日本学士院会員、国立西洋美術館長、独立行政法人国立美術館理事長などを務める。著書に「古代都市ローマ」(中央公論美術出版)、「ローマ帝国」(岩波ジュニア新書)、「逸楽と飽食の古代ローマ」(講談社学術文庫)など。

中田英寿 なかた・ひでとし／一般財団法人 TAKE ACTION FOUNDATION 代表理事

サッカー日本代表、チーム最年少でアトランタ五輪出場。98年イタリアセリエAのA.C.ペルージャへ電撃移籍。A.S.ローマなど伊英の名門で活躍。日本代表では初のW杯出場に貢献。引退後、一般財団法人 TAKE ACTION FOUNDATION 設立。伝統文化・工芸などを支援する「RE VALUE NIPPON PROJECT」をスタート。「GOLDEN FOOT AWARD 2014」アジア人初受賞など。

石井 隆一 いしい・たかかず／富山県知事

東京大学法学部卒。石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、自治省財政担当審議官、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。04年より現職。03年から06年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に『元気とやま塾』(入門—高志の国と世界を結ぶ)、「分権型社会の創造」など。

今日の朝ごはん

富山市

下尾和彦さん
さおりさん





今朝のメニュー

赤だいこんの千切りサラダ ごまと夏みかん
風味のドレッシング／アスパラガスのソ
テー／つるしベーコン／目玉焼き／ベッカ
ライコンディトライヒダカのブレッツェル
／大和屋の「コーヒー」

お気に入りの漆器や陶器の多くは、知り合いの作家さんのもので、茶道具も飾られている。テーブルや棚などの家具はShimoo Design製。お子さんの通学に合わせ、毎朝6時50分頃には朝食を。あまり添加物が入っていない、シンプルな料理づくりを心がけ、地元農家の土遊野(どゆうの)さんから、新鮮な野菜や卵を買うことが多い。

しもおかげひこ、さおり

Shimoo Designの下尾和彦さん、さおりさん夫妻は木工家。「美しい日本の道具」をコンセプトに、家具やインテリア小物のデザイン・製作を手がける。日本の文化や美意識を現代の暮らしに落とし込んだテーブルや器は、国内外のレストランが使用。LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 2017では隈研吾氏により『注目の匠』として選出。

基礎としつつ、モダンな美しさをまとった木工品を生み出している。「自分たちが、本当に使いたいと思うものをつくりたい」と語る夫妻のセンスや思いに共鳴した国内外のレストランのシェフから注文が入る。さおりさんの料理の基本は、素材のよさを活かした、手早くできるシンプルなものであること。家族の健康のために、添加物が少ない食事を心がけている。今朝は、半熟の目玉焼きに、つるしベーコン、アスパラガスをソテーし、赤いだいこんのサラダも盛りつけた。アート作品のようなブレッ

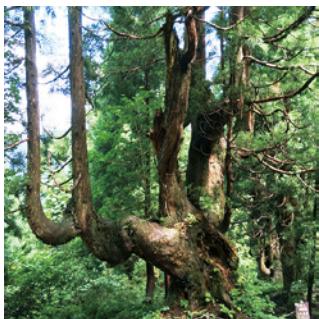
美しい木のテーブルには、シンプルに料理された朝食が並ぶ。水墨画のような木目が浮かぶ「浮様(ふよう)」と名付けられたお皿も印象的だ。

富山市八尾町在住の木工家でShimoo Designの下尾和彦さん、さおりさん夫妻の朝食風景。自作のお皿や盛りつけの美しさに加え、作家作品のカップ、春のお花、古い帯のテーブルセンターなどが独特の世界観をつくり出している。普段から季節ごとの行事や部屋のしつらいを大切にしているお二人。ご自宅は、町の中心部から少し離れた高台にある。ここで四季のうつろいを感じながら、日本の美意識を

取り寄せているもの。なかはもつちりとした食感だ。

「子どもの頃から料理が大好きで、お小遣いのほとんどが料理本に消えたほどになりました。その頃から家族の朝食も作っていましたね。きれいなもの、おいしいものが大好きなんです」と話す。インスタグラムなどのSNSでは日々の食事やお茶の様子も紹介。また、一人で作品を納入したお店に食べに行って、実際にどんな風に使われているのかを見るのも楽しみだとか。こうして料理や盛りつけのセンス、審美眼が磨かれていく。

二人は共にものづくりの町、県西部の高岡市で育ち、和彦さんの父は高岡銅器の原型師。伝統工芸が暮らしに根づいた町で育ったためか、和彦さん曰く、さおりさんは絶対音感のように、作品の美しい仕上がりのラインを視覚的にイメージできる「絶対ライン」があるという。一人の絶妙のやりとりがあつてこそ、ほかにはないものづくりが可能となる。最近では「浮様」ブランドのお椀や、ほかの伝統工芸とのコラボ作品を発表して新境地を拓く。美しい食卓も、感性を磨く大切な場なのだ。



日常を愉しむ富山人が案内します。

大切な場所を好きな時間

おでかけリポート



素敵はじめわじわと。

写真と文：富山市・山口久美子さん

富山市のデザイン事務所アイアンオー(株)に勤務し、グラフィックデザインや広告などの仕事をしています。仕事を通じて地元の色々なことに触れ、富山の良さを再確認しています。特に立山連峰の美しさは年を重ねるごとにじわじわと心に染みてきます。素敵なことはもうすでに生活の中にあるんだと感じます。今回は私の身近にあるほんの一部を紹介します。



ごちそうだった山の幸

◎ 山菜

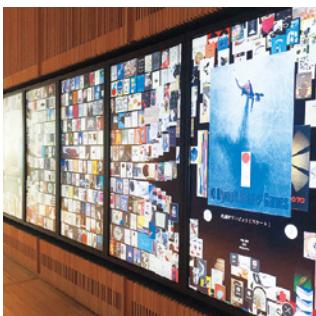
父方の祖父母が南砺市の山奥に暮らしていたので、お盆やお正月に家族で行くといつも大量の山菜でもなされました。むしろ山菜しかなかったようです。祖父と山に山菜を探りにいくと何本かに1本は残すようにといわれました。乱獲しないようにという山で暮らす人の知恵なんですね。子供の頃はおいしさも祖父母の気持ちもわかりませんでしたが、今は無性に食べたくなる時があります。



ねこに翻弄されるためのカフェ

◎ 月猫カフェ・富山市

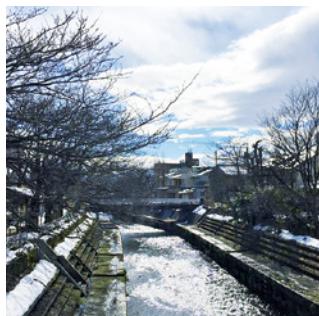
月猫カフェは猫たちが自由気ままに暮らすカフェです。暮らしている猫は何らかの事情でおうちが無くなった保護猫達。条件があれば猫の里親にもなれます。古民家を改装したカフェは、広い庭が木枠の窓ガラスから楽しめる素敵な空間。でも猫たちがとにかくかわいいので、景色を楽しむことをすっかり忘れ、あっという間に時間が過ぎます。 <http://tsukineko.jp/>



富山で世界を見る

◎ 世界ポスタートリエンナーレトヤマ (IPT)・2018年8月開催

今年は、IPTの年です!それは3年に一度、世界からポスターを公募し審査する国際公募展なんです。今年で12回目。国内では富山だけで開催されるという貴重なものです。ポスターはその国の文化や社会が反映されていることが多く、富山にいて世界を感じることができる展覧会です。しかも新しい富山県美術館での初めての開催とあって、今からワクワクしています。



ゆっくり流れる時間

◎ いたち川・富山市

会社から歩いていけるところにあるいたち川。ずっと川沿いを歩くとそのまま桜並木で有名な松川につづきます。きれいなのはいたち川も同じですが、こちらのほうが人がまばらでのんびりできます。春先になるとキジやカモなどがいたりお弁当を食べている親子がいたりと、うららかで穏やかです。いい天気の昼休みにぶらぶらしていると、会社との時間の流れの違いに少しだけ驚きます。

富山県立大学看護学部 来年4月新設予定！



富山県立大学では、看護を志す若者の進学先の確保と質の高い看護人材の供給のため、4年間で実践力の高い看護師の育成をめざす看護学部を新設することとなりました。

看護学部専用の富山キャンパス（富山県立中央病院に隣接）を富山市内に新たに建設し、学生のみなさんが快適なキャンパスライフを過ごせるよう準備を進めています。



④富山県医務課 県立大学看護学部整備班 TEL.076-444-4078(直通)
Facebookページ <https://www.facebook.com/toyamakendaikango/>

「ねんりんピック富山2018」11月に開催!

60歳以上の方々を中心とした健康と福祉の祭典「全国健康福祉祭」(愛称「ねんりんピック」)が、11月3日(土)から6日(火)の4日間、富山県で開催されます。県内全市町村を会場に、大会史上最多となる27種目のスポーツ・文化交流大会を行うほか、あらゆる年代の方々に楽しんでいただけるイベントを多数開催予定です。詳細は、大会公式サイトをご参照ください。

（㈱ねんりんピック富山2018実行委員会事務局（富山県高齢福祉課 ねんりん
ピック推進班内）TEL.076-444-2176（直通） 大会公式サイト <http://nenrin-to-yama2018.jp/> 写真・下：2016年長崎大会・総合開会式の様子（長崎県提供）



富山くらし・しごと支援センター(有楽町)が
お手伝いします。

とやま暮らしに関するご相談、移住支援制度のご案内、富山県内での現地案内など承ります。仕事面も経験豊富なキャリアカウンセラーが、就職相談、面接指導なども含め、就職決定までしっかりサポートします。また、移住者の生の声が聴けるセミナーも開催しています。交通至便な有楽町にある富山くらし・しごと支援センターへお気軽にご相談ください。



〔富山くらし・しごと支援センター〕 ◎有楽町オフィス(東京・有楽町／東京交通会館内) くらし TEL.080-8870-2456 しごと TEL.070-2798-7878
「くらしたい国、富山」ウェブサイト <http://toyama-teiju.jp/>

第31回全国健康福祉祭とやま大会
ねんりんピック富山2018

平成30年11月3日(土)～6日(火)



ねんりんピック史上最多となる**27**種目を県内全15市町村で開催します!

A horizontal banner featuring 12 icons representing different regions or districts of Japan, each accompanied by a small character illustration:

- 北海道 (Hokkaido)
- 東北 (Tōhoku)
- 関東 (Kantō)
- 中部 (Chūbu)
- 近畿 (Kinki)
- 中国 (Chūgoku)
- 四国 (Shikoku)
- 九州 (Kyūshū)
- 沖縄 (Okinawa)
- 鹿児島 (Kagoshima)
- 宮崎 (Miyazaki)
- 福岡 (Fukuoka)

主催●厚生労働省・富山県・一般財団法人長寿社会開発センター 共催●スポーツ庁

ねんりんピック富山2018 実行委員会事務局

合せ +930-0085 雨山市丸の内1丁目8番17号 オルム内ビルディング4F TEL 076-444-2176 FAX 076-444-3203
Mail: nennin@osp-pc1.toyama.jp 会員登録サイト: <https://nennin-toyama2010.jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/nennin.toyama>

— 1 —



川原製作所の紙



川原製作所 川原隆邦さんは、越中和紙の一つ、富山県朝日町蛭谷地区に伝わる蛭谷和紙の継承者の米丘寅吉氏に師事。現在は立山町虫谷の工房を拠点に活動する。和紙の原料となる楮やトロロアオイは、自ら畑を開墾して栽培。受注生産を基本に、さまざまな分野の人と対話しながら、ものづくりに挑んでいる。富山県民会館ロビー内装など、建築分野では大型の和紙作品を手がけるほか、立山町芦嶺寺地区に古くから伝わる護符を地域の人と共に復刻。ブリの皮を使った新作の護符も人気だ。U-50国際北陸工芸アワードでは、世界35の国・地域の403点の応募作の中から最優秀賞を受賞した。

<http://www.birudan.net/>



ここから伝統を始めていく。

ふわっと舞うのは、空間に溶け込むような薄い和紙。川原製作所の川原隆邦さんが手がけたものだ。国の伝統的工芸品である越中和紙の一つ、蛭谷(びるだん)和紙の継承者・故米丘寅吉氏に師事し、和紙づくりを学んだ。2017年に富山県で開催された国際北陸工芸サミットのU-50国際北陸工芸アワードでは「四次元展開図」を出品。写真のような薄い紙を33枚使用し、少しずつ透かし模様を入れ、それを重ねることで、四獸が浮かび上がるという技術的にも難しい作品で、見事、最優秀賞に選ばれた。

川原さんの受賞理由は、作品の素晴らしさはもとより、ものづくりへの情熱、挑戦する心が高く評価されたものだ。楮(こうぞ)などの原料は、自ら畑を開墾して栽培するほか、人との交流や対話を通して、つねに高みを目指している。

「新しい、古いではなく、『いま』という時や本質を大切にしたものづくりがしたい。そのなかで人が喜ぶものができて、将来的に、伝統になつていけばうれしい」と語る。「よく考えて、丁寧に創造する」ことを信条に、柔らかく、真摯にものづくりと向き合う。